

形而下の音を訪ねて ◇ 手塚玄惟

日々の生活の中に音は溢れている。けれどもその音の由来は、もちろん、実に様々で、その一々に心を止めて歩く人は却って珍しいのかもしれない。特に都市といわれる環境では、そうした音を見つめ直すための静寂が見つけにくくなっている。また物理的な面だけでなく、心理的・内面的な騒めきも、周囲から音がなくなればなくなるほど、より際立ってくる。それはどんな騒音にもまして、私たちの感覚を支配する。私たちは、外から入ってくる音になにかを求めているようで、じつは、無意識の底に沈殿した言語以前のうねりに、それが形を与えてくれるのを、何もできずに待っているだけなのではないか。

ひとの耳の音への官能を、一番よく観察できるのは、眠りに入ろうとするときだろう。良い眠りに落ちていくとき、私たちは、視覚からの情報、光というものを、まず遠ざけようとす

る。それが済むか済まないかのうちに、私たちはいつしか来たような、懐かしさに似たものとともに、意識の廻廊を下り始める。徐々にそれを辿っていくと、耳はそれまで捉えていた、絡まっていた音を、一つずつ、また一つずつ、そつと解いて手放していく。階下の低い機械音や人々の話し声、壁に掛けられた時計の針や歯車、窓際の木々のさざめき、遠くの微かなサイレン、雨戸や屋根にばらつく雨粒……。この時、私たちは言葉を知る以前の存在になって、深い呼吸と、可聴域のはるか下で鼓動の脈打つ音を聴きながら、私たちは次の光までの長い時間の中を漂う。

はつきりと目覚めているときでも、眠りの時とはまた違った音に触れることができる。教室の中で、あるいは歩いている通りで、ただ前面から入り込んでくる光を意識から少し遠ざけて、もつと全方位、左右、前後、上下のあらゆる方向に分散させていくと、やがて感覚が対象の幻影から解き放たれて、たゆたい押し寄せてくる音の海の中を泳ぎだす。そうし

## 随想

て沈降してゆく、あの眠りのときと同じように、自分の周囲に絡まった音の一つ一つが取り去られていくと、やがて最後には音でない音、はるかに高いようで、孔の中をうなるような音が、ずつと耳の中で鳴っていたことに気がつく。それは聴こうとすればするほど徐々に大きく、鮮明になっていくが、しかしやがて直接、平衡器官に作用するようになる。まるで深い海の底で、何万トンもの水圧に鼓膜を破られた人が上下の間隔を見失うように、私たちは神経の行き渡った身体のあらゆる輪郭を破られていくような感覚に陥る。私たちは、成層圏の何万メートルもの深さの大気の底に渦巻く対流が、私たちを飲み込み続ける音そのものを聴いていたのだ。

こうしたことを何度か繰り返していると、わざわざ光を疎まなくても、この感官を知らないうちに周囲に張り巡らせることができるようになる。光が生み出す諸々の芸当さえも、何かそのうちに語りかけてくるようなものがあるのではないか、とさえ思えてくる。

奇しくも、言葉は音としてはじまった。視覚的な印章を用いるようになったのは、そのずつと後だという。人間の感覚する情報の九割は視覚からのものが占めるというのに、それよりもずつと広い、私たちの宇宙の創造が、圧倒的に狭い感覚に拠っているというのは、どういうことなのだろう。あるいは、聞こえる・聞こえないとはかけ離れた別のところに、音というものが存在し得るのだろうか。

街を歩いていると、いろいろな人とすれ違うことになる。そのなかで、その人々の影が持つ雰囲気が自分の肩を過ぎるたびに、何かそこで摩擦とも、感触ともつかないものが生じる。人でなくても、例えばある建物の中に入ったとき、手すりや電灯の鍍具合、タイルや壁の塗料のはがれ痕、ひび割れ、外からの光の映りや音の透過性、その全てを包む佇まいが、自分の身に纏っているものに浸透して、その時、何かが浮き出てくるのだ。気が付くと、そこにあるのは目に見えるただの光景だけではない。伸縮可能となった時間、そのなかでたしかに、

## 随想

耳の奥、ごく薄い鼓膜や三半規管の微かな細動かもしれない、その場の空気、温度、手触りよりもこまかな動きの気配におおわれて、私はその空間を呼吸しているのである。それは音といってもいいのかもしれない。再びと出会うことのない、決して歌うことのできない「音」が、しかしありありと、日々の刹那刹那に重なって存在しているのだ。

こうした音に出会い、これが否応なく自分の輪郭を侵しては、新たに再生させていくのを目の当たりにするうちに、やがてどうにかしてこれを掴まえたいと思わずにはいられなくなる。そのきっかけは、それに振り回され続けることへの辟易かもしれないし、あるいはいつしか味わった他人との齟齬かもしれない。けれどもそのために使うことのできる材料、ある程度手に入りやすく、再生しやすいツールは、ずっと限られてしまう。さらにそれを追う自分自身の感受性も刻一刻と変わってしまうし、それを赤の他人にも追体験させたいと願うときには、ある程度の妥協を忌み避ける

ことは出来ない。すると、前後の断絶した新しいスペース、それならではの意味を付与された一連のコンテクストが、それ自身である完成形を持つように仕向けられるようになる。それが絵画だったり、文藝だったり、音楽であったり、あるいはもつと具体的な、建築や都市工学だったりするのだろう。

中でも音楽は、あまりにも無意識との距離が近く、受容のメカニズムが直接的ではないか。視覚によるものは覚醒していなければ認識されることがないが、音楽はその媒体の特殊性も相まって、構造的な制約を超えた作用を直に身体に及ぼしかねない。そしてその作用は、個々の特殊な経験に基こうとし、意識も言葉も、そこに手を伸ばすことは容易ではない。そのためか、まったくなじみのない民族の伝統音楽をいきなり聴かせても、ただの騒音としか思えず、そこに何らかの心象を見出すことができなかったりする一方、明治期の日本人のように、クラシック音楽のような、かけ離れた土地の音楽のある一節に、意外な親近

## 随想

感を覚えたりすることがある。

どうしてこんなことが起こるのか、きつと認知科学の分野ではこうした研究が進んでいるのかもしれないが、音による感覚を音以外で表現するのがとても困難なことは、言うまでもない。そして現代において、巷に流布している音楽はほぼ西洋のクラシック音楽の理論を源流とするもので、ほかの文化圏で興隆した別の体系による音そのものに触れられる機会を見つけないことが難しいし、それらを比べてみることも、またその必要をわざわざ迫る動機に出会うことすらも稀となってしまうのである。

けれども、こうした私たちの音そのものの在り方を疑わせるような表現の違いは、それがどんなに受け入れられなさそうであっても、それをよく知らないうちは、ひとつの感覚の可能性であるはずだ。その感覚が私たちの身体に根ざしている以上、よく分らない、現在の感受性に合致しないからという理由だけであるものを遠ざけるのは、自分たちのあり様

を自分たち自身で束縛しているようにも見える。やがてそれは心理的に、そして身体的に、私たちの歴史をも縛っていくことになるのではないだろうか。もしそうなったとして、その歴史の中で、私たちはどのようなものに胸躍らせることが出来るのだろうか。

ときには靄よりも淡く包み込み、ときには刃よりも深く突き刺さるもの。音楽、そして音楽以前のあらゆる音を求めて愛するすべての人々にとって、これが越えがたいものを超えてゆくための新たな糧であり続けてくれることを、ただ願ってやまない。

砂丘律に寄せて ◇ 関寧花

一番好きな歌集は？ と聞かれて千種創一の砂丘律をあげるようになったのは、初めて砂丘律という歌集を読んだからしばらく経ってからだ。中東の情勢について特別関心が（ないわけではないけど）あったわけではない。共感性が薄い私の読解では一読では読み落としてしまう歌もあった。初読で好きだと思った歌は多かったがなにせ四百首以上載せられている歌集だ。好きな歌など、あるに決まっている。しかし私はいつの頃からか砂丘律に並々ならぬ関心と思い入れを寄せるようになった。なにか良い歌集はないかと聞かれた時は迷いなく砂丘律を紹介したし、逆にそう気安く人に見せたくないという気持ちも同時に起こった。なぜこんなにも心惹かれるのだろうか。そう思いながら本棚を眺め、やはりまた砂丘律の背表紙を見つめているのだった。

砂丘律は風変わりな歌集だ。ペーパーバツ

クのような脆い表紙に、藁半紙のような目の粗い紙が綴じられている。本棚に並べるととても目立つが、粗暴で派手な見た目とは逆に折れたり破けたりしやすい。どうもわざとそのような装丁にしているようだ。鞆の中ですぐに本の表紙を折ったり汚したりしてしまう私は最初に手に取ったときはその脆そうな見た目に緊張したが、今では、むしろその脆さはこの本の寛容さなのだろう、と思い始め、ページの端は折れまくりだし背表紙にはヒビが入りかけているのをお構いなしに持ち歩いている。

千種創一の歌の特徴や性質自体もちろん読者の心象風景に訴えてくる要素や比喩がふんだんに用いられているのは間違いないが、汚れることや破損することを前提とした書籍の作りが肉体と砂丘律という本とをぐっと近づけているのだ。書物の寿命は生物よりも長い。本は、紙は長生きで物知りだ。その事実が人と書物に距離感を生む。砂丘律はわざと脆く儂い装丁で編まれたことで、手に取った人

## 随想

の肌に馴染み、まるで生き物のような親しみを感じられるのだ。普通、作者は自分の本を半永久的に残したがるだろうしその前提で本は作られている。思考や感情や理論やデータ、情報を明文化し、可視化して保存するために本があるのだから。しかし砂丘律は、あとがきで「この歌集が、(中略)砂のようにぼろぼろになつて、いつの日か無になることを願う」と明記されて終わるのだ。消滅することを前提として編まれた本がいったいどのくらいあるだろうか。

砂丘律に載せられている歌の多くに見られる特徴として、「アイテムの使われ方」があるだろう。歌集の中でも有名で、人気があるらしい二首を引く。

カフェラテの泡へばりつく内側が浜辺めい  
でもドトール(い)は p20 「白樺の南限」

煙草いりますか、先輩、まだカロリーメイト

食って生きてるんすか p35 「尼ヶ崎駅」

気持ちの移り変わりに思いや意識を向けること、感動を感動と認識すること。無意識下で発生する膨大な「感情」を、意識の下に引きずり出して言葉として編み直すことがどれだけ難しいか、歌詠みであれば、物を書いたことのある人であれば私などが言わなくてもわかっているとは思う。抽象的なモチーフの中に私たちの生活に近い肉体的な、生臭いモチーフ(カロリーメイトで命を繋いでいる先輩だとか、へばりついて乾き始めたカフェラテの泡だとか)が含まれることで、私は類似した光景または感情に出会うたびに砂丘律の表紙のころもとな厚紙の手触りや、紙の匂いや、そこに刻まれた感情について思いを馳せることになった。砂のようにぼろぼろになることを望まれた本を。そしてさらに思うのは、消滅してしまふものの刹那性にばかり目を向けて特別執心する自分の浅薄さを恥じたりもしたが、砂丘律のまとう印象について語る時にその点

## 随想

を無視することは不可能だった。どんな言葉も発言も履歴が残ってしまう、削除を自ら望まなければ消滅しないさまさまなものに取り囲まれて、風化に身を任せたこの本を美しく思うのは至極当然のことだろう。ということだった。

川の水のように絶えず流れていく感情というものを書き留めることへの著者の覚悟やエネルギーが最後まで、脆い見た目とは逆にページを繰る毎に強まっていく「砂丘律」。生きることに、思うことに、愛することに、消えていくことに。私の人生にもたびたび登場し、また、登場しなくてもどうやら存在しているらしいさまさまな、土煙のたたない国の毎日のことと。よせては返し、時に頭からかぶさってくるような、うねり、乾き、溢れるさまさまな感情と、ここではない国の、街の景色。そしてそれらを全て受け止める、受け流す主体。

すべての砂丘律が砂に還る前に砂丘律を読むことのできる幸運を嬉しく思うし、この本

を砂にするのは私たちだ。そして、その砂の上に、いつか誰かが瓦斯灯を植えたならば。